
恋 神 k o i g a m i

音紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋 神 k o i g a m i

【Nコード】

N 4 1 2 7 D

【作者名】

音紅

【あらすじ】

高校二年生になる茶子【サコ】は恋愛経験無し。そんな状態を脱すべく、思いついた名案とは…

零：プロローグ

『今年高校二年で恋愛経験皆無』って有り得ないと思います？

：大体の高校生は有り得ないんだろーなあ……。

けれど今年高校二年生になる私、桐島 茶子^{サコ}は

恋愛経験皆無なのですっ！

友達は恋話をしているのに、私は全く解らない……そんな寂しい状態から脱出するために、一つの名案^{みよつあん}が浮かんだのです！
その名案っていうのはこんな会話から生まれました……

＊

「ねえ茶子知ってた？」

「……え、何？」

親友である原田 花澄^{カスミ}に声を掛けられたとき、私はお菓子を片手に雑誌を読んでいた。

それに真剣だったためそれまでの会話を聞き逃していたのだ。

「まったく茶子はお菓子ばかり！太るよっ」

「えっ？嫌だっ」

「それは置いといて。……ね、あの森の辺に神社があるの知ってるでしょ？」

少し考えて、返事をする。

「あー……道路外れたところ？」

確かに私たちの住む町の外れには、木が生い茂った薄暗い森がある。

「そう。その神社には願いを叶えてくれる力があるらしいよ」

私は心底驚く。

「ええ！？あの古ぼけた、今にも崩れそうな神社に？」

「噂だけだね。でも確かめた人はいないんだって。茶子の言うとお

り、今にも崩れそうだから近寄らないの」

「ふうん」

「信じてないね」

もう一度お菓子を口に運ぶ。

「だって、そんなこと急に言われても…。しかもあの神社でしょう？ ナイナイ」

「…まあ信じないのも無理無いよ。誰も確かめてないんだし」
するとその噂話を教えてくれた希美子が言う。

「でもさ、行ってみる価値はあると思うの。私、両想いを頼んでこようかなっ」

「えー危ないよ？ つか希美子なら大丈夫でしょ」

その言葉が出た途端、私はきよとした。

しかもバッチリ花澄に見られている。

「あははっ 茶子には解らないよねー？ お子ちゃまだから」

「う、うるさいっ」

ここで浮かんだのが、名案。

『その神様に、恋をさせて下さいってお願いしたら良いんじゃない！？』

という物でした。

本気で信じているワケじゃないけど、希美子の言うとおり、願値はあるかなと思って。

零：プロローグ（後書き）

この度は『恋 神 k o i g a m i』を読んで下さり有難う御座います。

オリジナルで書くのは久しぶりでドキドキしています。
拙い文章ですが、是非最後までお付き合い下さい。

誤字脱字がありましたら教えて下さい。

一：名案決行

あらずじ＊恋愛経験皆無の茶子は古ぼけた神社の噂を耳にして…

「よしっ！終わった！」

今日の授業は全て終了した。

神社に行く気満々だった私は、挨拶の後、勢いよくガッツポーズ。

「茶子ー帰ろう？」

花澄に呼ばれた。

「あ、ゴメン。今日は用事があつて…」

不思議そうに首を傾げる花澄。

「そーなの？じゃ、また明日ね」

「うん、じゃーねっ」

明るく挨拶を交わすと、私は一度家に戻った。

暗くなると嫌だったから、着替えもせずに、鞆だけ置いて神社へ向かう。

＊

「…此处、だよね…？」

急に不安に駆られた。

そこはどう考えても神社など無い…薄暗いというか真っ暗な…森の入り口。

「怖っ…！けど此处で帰ったら意味がないよねっ」

自分を奮い立たせて森へ入る。

少しの物音にも怯えながら、それでも進むと、赤い鳥居のような物が見えた。

「あ…あつたあ…！」

喜びで飛び跳ねた。

そして近寄っていく。

「…どうか、私に恋をさせて下さいっ」

パンパンッと手を打つが、何も起きない。

「あ、そっか。すぐに叶うワケじゃないよね。神社だし」

と言って家に帰ろうと足を向けた。

すると。

「オイ」

背後で、明らかに女の人の声でない声が聞こえた。

「き、気のせい気のせい…」

自己暗示をかけながら立ち去ろうとする私に向かってもう一度。

「待てよ、オイ」

私は耳を塞ぎ、歩いて森を降りていく。

もうすぐ　　というところで木の根に躓いた。

「ほわあああっ!？」

「!」

ザッ

何かが滑り込むような音がした。

恐る恐る目を開ける。

「あれ、痛くない…」

「つてえ…」

「ッ!？」

一：名案決行（後書き）

此処まで読んでいただき、有難う御座います。

これは多分、前のお話より長くなると思っております。

一話ずつ少しでも成長していけるように頑張りますね^^

誤字脱字がありましたらお知らせ下さい。

二：衝撃が駆けた

あらずじ*名案が浮かんだその日、早速神社へ行つた茶子だが…

私はその状況に絶句する。

体が痛くなかったのは、別の人を下敷きになっていたからだだった。しかも、見たことの無いような、綺麗な顔立ちの男の人…。

「痛えんですが…早く退いて下さい」

「あ、す、すいませんっ」

瞬時に起き上がると、もう一度彼の容姿に見入る。

サラサラの黒髪、赤い瞳、白い肌。

その円らな瞳には間違いなく私が映っている。

「何見てるんです」

「いつ…いえ！何でもありませんっ」

しかし、それにしても…。

変わった格好だな、と思った。

和服。派手な物でない、落ち着いた色合いの。

何故この季節に、このご時世にそんな格好をしている？

それに。

「あの…どうして此处にいるんですか？」

それさえ解らない。

すれ違った人なんていなかったし、同じ高校生なら近くに高校は茶子の学校しかない。

なら行くときに一緒になるか、見掛けるかするはずなのだ。

「だって、呼んだのはアンタでしょう」

「へ？呼んだ…？」

「ついさっきのことを憶えてもいないんですか。…こりゃハズレだな」

「は、ハズレって何ですか！初対面の人にハズレだなんて、失礼じ

やないですか！」

しん…と静まりかえる。

「アンタさっき、願い事をしたでしょう」

「え？願い事…」

先程の、神社でのことだろうか。

「はい…しました、けど」

「俺はアンタの願いを叶えるために来たんです」
思考を整理する。

しばらくの沈黙、そして。

「ええええっ！？神様あ！？」

「神なんてすげえもんじゃねえですけどね。アンタに呼ばれちゃった以上、叶うまで一緒にいさせてもらいます」

「叶うまで…」

口も態度も悪いけど、願いが叶えてもらえるなら。

そう思った私は、意を決して頭を下げた。

「宜しく願います！」

二：衝撃が駆けた（後書き）

此処まで読んで下さり、有難う御座います。

関係ないですが私は敬語の遣える男性が好きです（笑
格好良くないですか？

誤字脱字がありましたらお知らせ下さい。

三：トキメク、ココロ。

あらずじ*神社にお願いをし終えた茶子の目の前に現れたのは『神様』だった…？

「…アンタ、名前は」

上から目線で訊いてくるその男は、外見年齢16、7という感じだった。

同学年…いや、学校で見たことはない。

また彼の顔をじっと見つめて答えない茶子に、男はもう一度訊いた。「聞いてます？名前はなんて言うんですか」

やっと我に返る茶子。

「はいっ！き、桐島茶子っていいです！」

満足げに口の形を歪める。

「サコですか。俺の名は斎^{イツキ}。宜しくお願いしますね、茶子」

非の打ち所がない微笑みに、茶子は完全ノックアウト。

逆上せた感覚になり、ふらりと後ろへ傾く。

「お、おいっ」

がくん　と衝撃が走り、やっと目を開けると、斎が手を掴んでいた。

「何度転びそうになったら気が済むんですか。もうさっきみたいな痛え思いはしたくねえ」

「あ…す、すいません」

よたよたと体制を立て直し、歩き始める。

所々剥き出しになった木の根に躓き、ぬかるんだ地面に足を滑らせる。

その度に斎に助けてもらう始末だ。

顔が相当火照っている。

熱に浮かされているようだ。

「ったくよお……」

斎がそう溜め息混じりに言うと、ぐいと茶子の手を引っ張る。

「え……？」

「裾掴んで下さい。危なっかしくて見てられねえや」

「　　ありがとうございます……」

茶子の心臓が跳ねている。

とくん、とくん　それは顔の火照りと比例しているようだ。た。
この気持ちは何なのか、茶子にはまだ解らない　。

三：トキメク、ココロ。（後書き）

読んで下さって有難う御座います。

もっと楽しんで書けたらな、と思っている今日この頃。

誤字脱字がありましたらお知らせ下さい。

四：こ都合主義多いに結構！

あらずじ＊呼び出した彼は斎。本当に恋をさせてくれるのか：

斎は茶子が立ち止まった正面にある家を見上げ、

「へえ。結構でかいじゃねえですか」

と感想を述べる。

「：お母さんに何て言えば良いんだろ。急に男の子連れてきたら驚くだろうし」

茶子の家には母しくないない。

父は単身赴任で海外だ。

独り言のように彼女が言ったのを聞いた斎は、当たり前とも言つように伝える。

「ああ、それなら心配ご無用ですよ。茶子のお母さんにとって俺は暫く預かることになった知り合いの息子ってことになってるんで」

「え、そんなご都合主義なの？」

「この手の話は大体そーなってるでしょう？漫画とか読んだことねえんですか？」

「あるけど。あ、でもそーゆう話って多いかも」

「納得できました」

決めつけた言い方をして、先に家に入る。

「只今戻りましたー」

「ただいまあ」

茶子もそれに続いて帰りを知らせた。

「お帰り。寒くなかった？」

キッチンから母親の和子^{ワコ}が顔を出す。

「うん、制服だったから」

斎が茶子に耳打ちをする。

「ところで、お母さんの名前は何ていうんですか？」

「…知らずに知り合いの息子演じる気だったの？」

「細けえことは気にするもんじゃねえですよ。で？」

「和子だよ」

「ワコさんですか」

会話が終わったところで、タイミング良く母が話し掛ける。

「斎くんは？こっちにはもう慣れた？」

「はい、すごく良いところで嬉しいです。一生暮らしたいくらいですよ」

彼の完璧な笑顔が、母の胸を打ち抜く。

その隣にいる茶子は、半ば呆れたような目で斎を見た。

「あらあ、それは良かったわ　そーだ、茶子、お風呂沸いてるわよ。入ったら？」

「うん」

言われるがままに、風呂へと向かう茶子。

その背中を見送りながら、母は微笑んだ。

「…ふふ。斎くんが茶子を落としてくれれば良いんだけどね」

「えっ　…和子さん？」

聞き間違いだろうか？

けれど今、確かに。

「あら？でもそーなったら、一生此处で暮らせるかも知れないわ
なんちゃって」

そう言っと、母は微笑みながらバスルームへ、タオルを持って行った。

四：こ都合主義多いに結構！（後書き）

読んで下さり有難う御座います。

更新が少し（？）遅れました。
すいません。

…個人的にお母さんと斎くんが書くの楽しいです。

五：嵐の予感

あらずじ＊茶子の家では斎が知り合いの息子という設定になっているらしく…？

彼女は自分の部屋にいた。

ジャージに着替え、濡れた短い髪を束ねている。

「…神様、かあ…」

「呼びました？」

突然聞こえた声に驚き、瞬時に振り向くと、背後に斎がいた。

「はあああっ！な、なな何でいるのっ」

「いや、呼ばれた気がしたもんで」

「ノックしてよっ、ノック！」

「ああスイマセン（棒読み）」

「謝る気ゼロなワケッ？」

「ありますよ。…見えないくらい小さいけど」

「今、とっても言わなくて良いこと言ったね」

「…お母さんが呼んでます。夕飯だそーですよ」

茶子は「解った」と言いながら立ち上がり、部屋を出た。

夕食を食べ終え、斎が風呂へ向かった。

「お母さん、斎くんの両親って何処にいるの？」

「あれ、何処だったかしら」

（超適当おおっ）

愕然としてみると、母は思い出したように口を開く。

「そーいえばね」

本棚から、薄い本のような色紙のような物を持ってくる。

「茶子にお見合いの話が来てるの」

開いて見せたそこには、綺麗な顔立ちの、同い年くらいの男が映っている。

「へえ、そーなんだ　　ってええええっ!？」

「なんかね、お父さんが茶子のこと心配しちゃって」

「心配の仕方間違ってるの、これ？」

「間違ってるわ。愛情表現って色々種類があるモノよ」

「…」

絶句。

母がコホンと咳払いをすると、相手について話し始めた。

「相手の方はね、吉池グループの御曹司で、吉池俊彦さん。歳は茶子と同じ。顔も芸能人レベルでしょう　斎くんほどではないけど」

「う、うん…」

「しかもね、恋愛未経験の茶子にはとーても良いお知らせ」
「？」

茶子の頭上にクエスチョンマークが出たとき。

「吉池さんは茶子に一目惚れらしいの　きゃっ」

「はあ　　っ!？」

「写真を見てね」

「いつ撮ったの!？そんな写真っ」

「こーゆうキチンとした物じゃなくてね、家族写真的な、修学旅行の集合写真的な？」

「なんで見せるの、そんな物っ」

「だって、どうしてもって言われたら見せるしかないでしょう?」
拳を固める。

「ってゆーかっ!私はお見合いなんてしないよっ?」

「えー?じゃ斎くんと、こっちの人とどっちが良いの?」

「ヘッ……?」

「上がりましたー」

丁度良く、斎が着替えて戻ってきた。

「何の話ですか?」

「これなんだけどね…」

「私はっ」

顔が熱い。

何でそんなことを言うだけで緊張するのだろう。

解らない…けど、言わなければ。

「……斎の方が良い…」

「？」

「やっぱり？じゃあ斎さんに任せちゃおうと 茶子を宜しくね、斎くん」

「へ、あ、ハイ」

五：嵐の予感（後書き）

遅くなりました（汗

読んで下さって有難う御座います。

急展開：出来ればいいなと思ってます（え

誤字脱字がありましたらお知らせ下さい。

六：『相手は誰でも良いわけじゃない』

あらずじ*なんと茶子にお見合いの話が来ているらしく…？

*

お母さんも寝付き、私は斎の部屋へ行った。

斎が訊いてきた、先程の話の説明をするためだ。

「へー、そーゆー話だったんですか」

あくまで軽く言ってくる斎に、私はげんなりする。

「斎にはその程度の話かも知れないけど…お見合いかあ。何か、嫌だ」

温かいココアを飲みながら、斎はきよとした表情で見えてきた。

「嫌？恋がしたかったんじゃないやねえんですか？」

「んん…。そーなんだけど」

どうも、胸に引っかかっている物がある。

「何にせよ、俺あアンタの願いを叶えに来たんだし、恋してもらわねえと」

「ははは…」

迷惑なんだろうな。

私と同じ立場なら、さっさと願いを叶えて、帰りたいと思うもん。

斎の整った横顔を見た。

すると、急に真顔になって私を見る。

「…相手は」

「え？」

「相手は、誰でも良いんですか？」

「え…？」

ガタンッ！

「へっ　！？」

一瞬にして押し倒されている。

ふわりと斎の香りが、私を包んだ。

「な…なに？斎？」

状況に気づいてから心臓の音が大きく感じる。

斎にきこえてなきや良いけど。

そう思ったとき、彼が微笑した。

「ははっ…心臓の音、此処まできこえる」

「！」

「意識することねえでしょう。相手は誰でも良いわけじゃねえんだから」

とか言いながら、思い切り意識させたいらしく、耳元で喋ってくる。

「意識することねえって…耳元で喋ってんじやんかっ」

「…　ドキドキ、します？」

私の手を取った。

身動きが全く取れない。

「はっ…離してよおっ…」

「離しません」

「なんでそんな　んんっ！？」

唇に柔らかい物が触れた。

「んん…っ！」

同時に、私のモノでない鼓動が唇から伝わる。

「ふあっ　やめ…ん…」

十秒ほど重ねていたかも知れない。

やっと唇が離れると、斎の顔がよく見れた。

「斎…顔、真っ赤…？」

「！」

「まさか斎…私に、ドキドキしてたの…？」

六：『相手は誰でも良いわけじゃない』（後書き）

大分間が空いてしまいました。すいません。

読んで下さっている方々、本当に有難う御座います。
まだまだ続く予定ですので、宜しく願います。

七：溢れる想い

＊あらすじ 茶子にキスをした斎は…

斎は答えてくれなかった。

一瞬だけ見えた、哀しげな顔が目には焼き付く。

確かに頬は赤かったのに、瞳は哀しそうだった。

「……すいませんでした。もう寝ます」

感情の籠もっていない声を残し、彼は部屋を出た。

「斎… ？」

翌日、母は電話を掛けていた。

「あ、もしもし？はい、お見合いの件なんですけど…」

私はほっとしていた。

断るための電話だと雰囲気で解ったからだ。

「はい、茶子にはお見合いなんてまだ…え？えっ…いつ決まっ
たんです？」

後半に入り、その空気は一転した。

母が焦っている。

「そんなっ…会っただけでもって…ええ、はい…解りました、言っ
てみます」

受話器を充電器に置いた。

「…お母さん？」

制服のリボン結びながら、俯く母を呼ぶ。

「茶子、お見合い…決まっちゃったみたい」

「え、何でっ？」

「解らないの。知らないうちに全部、日取りまで決めてあつて…」
申し訳なさそうに首を振った。

「会っただけでも良いって言われたけど…どうする？嫌なら嫌で良い

のよ？」

少し考え、頷いた。

「良いよ。会っただけで良いんでしょう？行きます。美味しい料理、食べれるの？」

予想外とでも言いたそうな顔をして、母は答えた。

「う、うん…イタリアンらしいけど」

「やったー 楽しみっ」

「じゃ、明日の放課後、迎えに行くわ」

平然としてみせたけど、実際は混乱していた。

何でお見合いの話は決定したんだろう？

お母さんに覚えがないとしたら、他に誰が？

「…斎」

帰宅途中、私は立ち止まった。

隣を歩いていていた斎は、後ろを振り返る。

「どーしました？」

「…お見合いの話…」

思わず彼から目を逸らす。

「斎が言っただんでしょ…？」

「！」

「そんなに迷惑だった？私…そんなに早く帰りたいかった？」

斎は少しも動かずに、ただ私の問いかけを聞いていた。

「ねえっ…私、斎のこと縛ってた…っ!？」

自然と涙が溢れる。

彼の答えを待つだけで、こんなに胸が締め付けられる。

何なんだろう？この気持ちは……？

「いつきっ……!!」

気づくと、私は斎の腕の中にいた。

暖かい体温は本当の人のようだった。

七：溢れる想い（後書き）

遅くなりました！

恋神もラストスパートです。

最後までお付き合い下さいませっ。

八：消えゆく貴方

あらずじ＊斎に問いかける茶子。涙した彼女を斎は…？

「…ごめん」

「謝ってほしくなんか…ないの。私は斎に答えてほしだけ…」

「俺は、帰りたいはずでした。けど…茶子がお見合いをするって聞いたとき、意味の解らない感情が溢れて、俺は俺を保っていることができなくなっていました」

抱きしめている両腕に力が籠もる。

「これ以上側にいたら、茶子が別の男と結ばれない限り…諦めることができなくなる。そんなの、迷惑以外の何物でもねえ」

耳元で紡がれる素直な言葉。

聞いているだけで切なくなる。

「だから、俺の気持ちバレねえうちに帰ろうと思ってたんです。

…でも駄目でした」

「…斎」

「俺はもう帰れません。帰りたくねえんです」

「…どうして？」

「茶子のことが、好きなんです」

全身の力が抜けていくような感じがした。

「わっ…私…私もっ…」

今実感した。

私は間違いなく、斎のことが好きなんだと。すると同時に、彼の体が透き通った。

「!？」

驚く私。

ふふ、と寂しそうに笑う斎の顔は、綺麗だった。

「茶子の願いは『恋をしたい』だったでしょう？だから、もう願いは叶ったんですよ」

「だから、だから消えちゃうの！？そんなのいやだっ！そんなの…好きになつた意味ないじゃないっ」

「…最後くらい、我が侘させて下さい」

もう一度私を抱き寄せた。

優しく、消えかけていたけれど、確かに暖かく。

「ごめん…」

一方的にキスをして、空へ舞った。

八：消えゆく貴方（後書き）

お付き合いいただきありがとうございます。
次回で最終話となります。

最後まで見届けてもらえれば幸いです^^

最終話：隣

あらずじ＊空へと消えた斎を想う茶子は…

「斎…泣いてたの？」

手の甲に落ちた雫を見て、茶子は呟いた。

「ごめん…ごめんね…」

＊

次の日の朝、茶子は制服に着替えて神社へ向かった。

「なに、この音…？」

近づくほど大きくなる機械音。

嫌な予感が実現された。

「……！」

斎のいた神社は取り壊されていたのだ。

「なっ…どーして壊してるんですか!？」

ヘルメットを被った男に訊く。

すると彼は、茶子の頭をポンと撫でて言った。

「此処はなあ、もともと壊れそうで危なかったんだよ。誰か下敷きになったら大変だから、撤去しようってことになったんだ」

「そんな……」

家の前まで戻ると、がくん、としゃがみ込んだ。

絶望が茶子を包む。

「斎…もう会えないの、解っててキスしたの…？ずるいよ、そんなの…馬鹿あ…」

「何言ってるんです？」

突然背後から聞こえた声に驚いて振り向く。
そこには。

「…斎？」

幻だと思った。

けれど彼が、茶子と目線をあわせるためにしゃがみ込み、頬を撫でて気づく。

「何でいるの…？」

「いちや悪いんですか？」

相変わらずの憎まれ口。

茶子はそんなことお構いなしに抱きついた。

「うおっ！？」

「バカッ…馬鹿あ…私、お見合いなんてしないからねっ…」

斎はそつと彼女の頭を撫でた。

「撤去って言われても、神社ごと潰されるなんてごめんでしょう。だから慌てて引越してたんです」

「…何処に」

「そりゃあ勿論」

斎が見上げた。

つられて茶子も見上げる。

「『ウチ』にですよ」

数年後。『吉池グループ、社長独身のまま海外へ進出！』という記事が載った新聞の横。

飾られた写真の茶子の隣には、確かに“彼”が微笑んでいた。

最終話：隣（後書き）

最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました。
読みにくい部分もあったかと思っています。

次の作品ではもっと上達したいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4127d/>

恋 神 k o i g a m i

2010年10月11日14時27分発行